里見八犬傳 拾七編 巻四十二

13
3416
93

13
3416
33

拾七編

東都　曲亭主人編次

文政壬申
秋
勝山館

四十二

南總里見八犬傳第九輯巻之四十二上

第百六十九回

野元を拾出されて親兵衛賜を受く
風葉を帚除して諸勇士立談を

話表を犬塚信乃戌孝い料も葛西る底不知野の頭や。犬江親兵衛仁ゞ為ふ二騎の敵を斃し込て他ゞ親山林夫婦の舊恩を報ひ〜のこゝろぞ底不知の坑ふ陷ふ。親兵衛も亦恙ゝ。件の坑より吹起る勁猛風ふ吹騰されけ人馬故の儘ふ〜く出ることゝなりぬ。信乃ゞ欺びふぐ〜もあ〜び眼を定めつゝ。つゝと見ゝ忻然として先問ふ。犬江和殿ゝ幾の間ふ京師よりかゝる歩て今番の役ふ参り會ゝる。況や二騎の敵を迂歩て謀てあの坑ふ陷ゝ〜見まぎゝ〜ふ。特ま奇ゝ坑中より。白氣立升るとあゝて。且猛可ふ吹ゝ〜風の音雷霆の响と

共に自然に生ずるとなるは必是其身を衛る霊玉の大奇験と伏姫神の冥助あるべしかりてあの幸あらんと只這奇事のことを義に和殿が稲村の御厩人に預け置たり其名馬青海波は我和殿と憶ふの故か這回の陣中に牽のく来なるに昨宵其馬はおのづから絆を解て走り狡然うぢち人に編れ狡徃方知さびと雖ども後悔臍を噬るのと當晩は我火猪と放ちて寄隊を敗まく欲る折へければ井と索るに皇るるり一に見れば件の青海波は則和殿が乗て在るあも亦大奇とのみべし我は方僅那滸我の佞臣多横堀史在村と新織帆太夫素行ぎ合は三騎落てもくを赶蒐て射く斃せとを行れども在村は馬より隊そが儘の乗せて馬の走るを赶捕へんとくちに来つ憶ぎ和殿に両敵ある馬をうへ鎗をのく坑る和殿を刺まくせと遮り制めて戦ふく斃して和殿の窮厄を拯ひ行そける絶び何事狡亦是に優さびたれも行せぬ六稔の昔日我身行徳の古那屋

に必死の窮厄あり一時和殿の先人山林が我身に代りて義死の臨終我に感謝に堪ざれば其折は年四才なり一和殿とを引よまく我山林に拝言らく後年この子成長りく倶に戦場に蒞むあらば我前面に立ち死も代りて今日の恩義に答んと言葉の露霜に代謝く六稔を便宜なり一に今茲の冬君家の軍役倶に防禦の使命ありく水陸二箇所の大敵に向ども争何せん和殿を京より還らねば安危と倶に做一かと思ひ者と思ひ不測に越く折を行く這里に和殿の窮厄を繹も拯く我前言を全く果て世に在人と後易くなれとも噫嘻天る平時るかも和殿の地に在ざり一かどの一要時も胸に絶れば和殿の愛馬を牽せ来つるは是も亦和殿に代る二物の防禦使なんと恵へば又只その意味のみ見更我撰る這縄は和殿の爺奴の血染の衣と我年来艱苦の中も身に添て失ぬ深く藏め措ざり一と這回縄に作らせり。

ちゝ乗
おもの
うげすと

おの
そもあらぬの
底不知野ふ
おの
信乃
あんべ
親兵衛を
すく
ふ

其芳名を自家の士卒ゆ敵もいくぐ知せまく欲するまでの所行なれと心の誠
うち出く告もあろ問も尋る閑談細やうえければ親兵衛馬上ゑ頭を低て聞
坐ゆ感涙の進むを覚ず長嘆して果せるうるく至誠い必や神の如し犬塚主の
孝順忠信人の及ぶ所にあらず誠心誠意低まぞゆ最厚しとも敦くぞ
あゆ不測の援をうて相逢ふをゑるべけんや我身い必敵の鎗ゆ刺れて身ハたの
坑ゆ命終らば人知ぞしるべけれ然ばたの再生の洪恩を千言萬句ゆ盡とも
嗚るべくもあるぞか。寔ゆ此上ゑ幸ひるる哉就て咱等い姥雪直塚们の伴當駅
兵を領て今朝あもかう来ぬる程ゆ料らぞゆ付る這馬の足掻ゆ任せく御曹
司の御危戦を援けなり。且勍敵長尾景春を敷ゆ破ら走らせて其子長尾
為景を擒ゆせ一ゆ。又那河鯉佐太郎の政木大全孝嗣石亀次図太越卿三と
三人共ゆ幸ひ一てかの折死ぞ月屬両図河原ゑ。向水五十三太ゆ宿所ゆ在り一ゆ。

我ゑ先ゆ御曹司の闘戦を援けまつく長尾を拉く力戦せ一ゆ。都て是ゆ社ゆ
まぞも。曾話ゑと言ゑれゆ。恁枯草繁ゆ処ぞゆ下馬あぞも。尻を掻る石ぞゆ見ゑ。
あ一と。那里ゆ故る松の下ハ結縄草あ一。憩ゆ宜一。卒ゆ那里ゆく。倶ゆ意表を驚
き。べ一。とのゆ信乃も見ゑつく。現那松蔭ゑとゑンめれ。和殿ゆ据ゑ肇て知ゑ原来
御曹司も亦御出陣ゑつく。長尾と戦ひゆ一狭鄙語ゆ云燈臺ハ倒ゆ下間くして。
今肇て吟く鈍ゑ一さよ況や政木石亀ゑゆハ最も芽出ゑ珍説ゑ蚊く所
ぎいあるべくぞ。卒々とのひくも倶ゆ馬を歩行せく。徐ゆ松の邊ゆ造ゑく。下馬し餘
蕤ゑゆ析ゑ犬飼現八杉倉直元田税逆友真間井秋季頭人隊長陸續と。信
乃ゆ兵ゑも従て寄隊の両将顕定成氏の敗れ走ゑ一を廷捕へんとく。索ねてゑゆ来ゆけ
ゑゆ。信乃ゆ一個の若武者と共伴ゆ憩ゆ居ゑを遥ゆ見て。現八ゑも自餘の隊長と
倶ゆ馬ゑゑ下立く找ゑく。信乃ゆ犬塚。和殿ゆ顕定主を那里ゑゑ廷亡一ゑ。

咱ら者ハ副將憲房と獲られば継橋綿四郎ハ守らせて臺の城へ走せ去り。卒立ち共侶ふ索れて顕定を捕へんぞと。親兵衛と見へて胆を潰つ。又左見右見て大江和殿ハ幾間ふ京師よりかつて來て這戰場ふ在りけるやと問へば親兵衛微笑て然へ咱ら者ハ今朝あの地ふ馳就て御曹司の御危戰を援けまつる敵兵の逃るを迂くあの野邊遣ふ來く料らぬも必死の厄あり。幸ひ犬塚ふ拯れて今這里ふ來ると。現ハ吟あへぬ開い又奇へ最芽出て。御曹司の御出陣も遅吟知らぬ程の事ぞ。時過れば乙も甲も寛やかそ聞べけれ今の急務ハ晉領の往方求獵て懲さぬ異日又寇ぬべ。卒共侶ふ立ち去るとのたまふと。信乃ハ禁めく徐ふ問ふ犬飼さを惴りて。這回館の御軍令ふ只彷徨と上目として殘忍慘刻の挿話を饒しぬ。非如寄隊の將帥とも逃ぬ脱ぬ寛仁大度の御旨ふ比べを稱めべけれと。現ハ忽地覚ゆて然へ我徳ふ今ふ人馬を憩へて敵ハ一人も在らぬ。ふ岡山の陣所へかへるべ。と答て後方を見るれば直元逸友あるを。秋季と共侶ふ我をよりて親兵衛ハ歸國の歎ひを舒るとて當下信乃ハ現ハ者ふ出ふ在村と素彩を射て斃しける事を首めく。親兵衛ハ謂て人馬者ハ野中の坑へ陷りし折信乃ハ者。其両敵を斃あるを又親兵衛ハ坑中より吹起る猛風ふ吹出されて騎馬の儘ゆく差ゆく出來るの尾ぬ。其大男を說示せば大家聞て感嘆を開ハ中ふ現ハ八ゆ笑点向て信乃ふ向ひ大塚和殿の挿話ハ都て至妙ふあらぬけれど就中横堀史在村と新織帆太夫素彩を射て斃せるハ愉快ハ那在村ハ奸佞多君を惑ハ民を虐ハ能を媚ハ賢を憎ハ曩ふ我苦流罰を和殿と組數ある微らせば竟ふ那奴ふ虐げられて牢獄中ふ命終ハ又新織帆太夫も常ふ在村ふ媚諛て曩ふ和殿の搏捕を請兼ハ德ふ來て求獵ハ惜むべ。犬江の爺孃ハ死て和殿を救ふ至れり。ふると今番那奴

ぬる轍を漏しなば弥勒の世まで後悔其甲斐なからんに天羅張得て路を譲らば和殿に誅戮せられしは造化の小児の筭帳精細なるに脱落あることあり況や和殿が山林に報恩の前言を今番の役に果さまへしは神ならずして誰か知んやと侍難て云云と催促なする人もあらば鄙語にも親の心を子知ずとてありけれと呵々とうち笑へば親兵衛は愀然たる貌を改めて且信乃等にうち向ひて犬塚よ犬飼も聽ねへ唱るが京師に在りし時政元主に抑留せられて憂苦の中に日を渉りけり其事共顛末は一朝に尽しがたかり并ハ且く言省て我厄解けて去る程に華洛を辞し去ましハ十一月二十四五日の時候なりしに憶ず路に掩留して今朝稍其地に馳就ける首をいへば箇様々々尾ハ又箇様々々と石馬走帆のなる又信濃路より這回の役あるよしを予知りしなる又千住河原にて愛馬青海波の河を渉して来路に逢ある並に馬盗児活間野目奴九郎のなる及二四的寄舎五郎須々利壇五郎等なり。

又親兵衛们が長尾景春を敗り走らせしなる且再戦して長尾為景を生拘りしなる。亦政木孝嗣石亀次団太越鯽三等が再生の事共顛末及向水五十三太枝獨鈷素手吉が義侠のなる並に孝嗣ハ義に仗て次団太鯽三五十三太素手吉等と倶にヨヨく其毎をおらく義通君の闘戦を援けて軍功ありしなる都て般余を共に言を約にあて漏もなく告しかば現八以下の頭人隊長听々倶に感佩して美談とぞ称へける當下信乃ハ笑しげに親兵衛にうち向ひて犬江よ原来那青海波ハ昨宵盗児に牽去られしを事なく今覚得りしに遽莫昨宵岡山の陣営ハ三面寄隊に戦車のく囲れしかば鼠も暢ハず且背の方ハ泉水河なるに他ハおのて潜入べき馬さへ竊去ありけん神変不測といふべくの現活馬の目抜郎が竊術こそ怪しけれといふに大家堪難て齊一咄と笑ひけり姑且して信乃ハ又親兵衛に向ひていふやう犬江這里ハ曠野にて君命を停る宜き地方ならねども明日まで閣くべきにあらねば謹て羔なりねと

信乃松下ふ
君命を親
兵衛ふ偽ふ

ふに親兵衛阿と応て身を引降りて跪けば信乃がの色う星裏ふ洲崎の御陣屋館
みづから軍令を定させゆく時大坂毛野を軍師ふ做され並ふ和殿と我れ七名へ
倶ふ防禦使るべと仰渡されて且節刀ふ擬せられる御大刀と各一口賜りて這
回軍旅の間倘軍令ふ違ふ者あらば先斬て後ふ告よと掟させゆく兵介るふかの折和
殿と犬村大角へ御使して他郷ふ在れい和殿ふ賜るべきを則咱ら遣與ゆる故又
大角ふ賜ると現八ふ預けゆくとて咱ら此の地ふ出陣の始より其御大刀さへ
腰ふ帯て身ふ帯刀のヨそを戮ぎ且青海波の名馬さへ奪せ来る心操へ嚮ふ解
示せ如ふ今るふ和殿析もよく今日の御陣ふかゝて且軍功の抜萃るへいまさ
えめの君命と兼らぎして防禦使の大任卓ふ求びて館の御本意ふ稱ひる武
門の冥加あるゆゑ一期の面目美ばべ卒々御大刀と遣與ゆぎ。とひて恥て腰を
撫りて二刀佩るそ中の一刀と取れば親兵衛へ謹て受戴ぎ腰ふ佩て身を

退せて答るやう臣若京師へ權相の為ふ豪留せられて亟ふ御使と果ふぎ危
躬存亡の時なる知ぬこの身へ他郷ふ在りける君恩當敬の義兄弟へ異ふ及を
仰ぎまられい身を措ふ所なきを辱く拜戴受納仕る却犬村へ何ぞの故ふ他郷へ遣
はゆゑ。と問ふを信乃へ推禁ゆそ不吉ふ此事由あれば今明々地ふ告ぬごと。
そを後ふて知らるべけれと答て現八を見ふて犬飼へ那折犬村ふ賜るべき御大刀ふ
あつる今も猶これあるやと問へば現八然ばとよ那仰ありー後異日隊配と定ゆられて咱ら
和殿と共伍ふ御曹司ふ從ひまつりてこの地の寄隊ふも向べ犬村とひとり遠くるの風然ば
役果ぎれば他ふ件の仰を伝へく御大刀と遣與ふ夫くもあれば因て當日軍師ふ就て悄地ふ
御旨と請なりふ館へ召て開へ我思ひ足らぬ現八を返辟ふ莽ゆ大角ふ値
遇せ一ふり他も亦大士るべ明徴ふと知りと狭ぎ一ふ此の縁故ふ今ゆ件の大
刀と現八ふ與らせ一ふけれも今隊配と定るふ方りて実ふ是不便ふ思ふ開いて

儘毛野に渡れば大角が別人をもて遣はせと仰あり。那御大刀の洲崎ゆくそが儘返しまゐらせ。大阪に遍與しらと聲低やかに答る折りから。蛯雪代四郎直塚紀二六潜地喜勘太等の伴當數兵並ぶに政木大全孝嗣石亀次因太越鄭三向水五十三太枝獨鈷素毛吉且二四的と須々利が臣下の兵まで長尾景春の隊長ら。直江包道宦佞美職政と力戰して敵を敗り追走せ。四下に敵の存ずるあらば。俱ふ隊の兵を従へて猶親兵衛を援んとて。密かに這里に来ければ親兵衛是を労ま。孝嗣以下新参の每を則現八並に直元逆友秋季等に告ていはく。引合ふ大家其義旗勤軍の大功を称賛ま。浩処に葛西三郎兵衛尉村長故老莊客每鈎脛衣して鎌竹槍を携へ。ら幾隊の里見の防禦使を来て俱ふ勝軍の壽詞を唱て且のおの小人每に年来里見殿の仁政を慕ひまつる処を。驚ふ寄隊の敗北あるを追撃て一人も脚を立させざるもなれども敵の首を捕る

とを饒しめざと。猶ほ捕ては悉く首級を齎しいたる。開戦に及び中ふ。我殿の權臣なる横堀史在村が那身矢傷ふ死しるが。乘る馬の鞍局ふ俯る隨ま来ふければ分捕仕り。他ハ民を虐る奸佞の吝えある者ゆく既ゆく死しられば。小人每里見殿へ孝順の證ふせんとて。其首斬て持参仕りしに。又今来時路ま。赤失傷ふ死しる落人あり。他ハ則在村が次職ま。同悪の佞人新織帆大夫素彳なるを知れる者の告しに。開も首捕てのく参り奴ハで実検を賜ひ。おそるく想て二級の首を。ま。信乃ハ引よせて得と検て。這在村と素彳ハ鄭ふ我が射て斃せし我君仁義の御軍令あれども。這在村素彳ハ君と惑し國を誘し罪死を容ざる悪人なれば必梟首せらるべし。大義ふもと。旁らハ現八ゆ。亦村長等ふ向ひて若れあへ来つるに便宜なれ約莫今日の闘戦ふ敵ふ。自家ゆも陣歿の者ふ。其亡骸を拾集めく。便宜の寺院へ瘞むべしとふを親兵衛ふ。ゆて大塚犬飼両賢兄ハ。恩ふ。ん殘ふ克殺を去るハ則館の

御本意なるぞや然べ今日の闘戰に自家へゆゑ敵とふとも陣歿して還るとこそ
皆是忠臣なるぬいなり。然るを其死を救ぎて埋めく壤に做るが長く怨みを結ん
のみ各位も知るごとく我に不死の仙丹あり姫神授與の神茅ゆく深疾に死したる
者とふとも二重直夜二十四時の中に蝕く是を用れば死を起して生に回ぎと辭言は早天に
枯くる苗の甘雨を得て勃然と起るも速る其經驗いはる比素藤に聽れて
御曹司の伴當們の皆甦生るを見て知るべし。その我什麼と請談ぎれば信乃は所
に歎ぜ。現犬江が揣る所婦人の仁に似るとふ者もあるを我恩ふ人なるぞ
夫博く愛まるは則天地の心に敵るも仙丹のく活して還し遣さば必や両曾領も
後竟に我君の大仁至德に感服して悔く怨を解るべし。意に今日の闘戰に返し合
せて戰死あくる寄隊の遊軍廿紀内外助及建柴某乙又滸我の近習る欲望見
科草なんど喚ん做くる壯佼い俱に恥を知り君を糞へて恩義の為に陣歿ぎる倘

是ぞと活しぬべ善を勸る一術なるぞ。と議ぎると現八推禁めて。そを亦咱ぎも同意
れども犬江が所云不死の神茅い僅に一箇の茅龍に藏めくるのこそなれに敵と自家に刀
瘡戰死千百人に送るく用るに足るべ死ぬと詰ると親兵衛ぎあへぎ其疑ひい理なるぐら
我神茅い幾十人に用るとも盡るとなく是裏に自家の刀瘡児にヨヌく是を用ひ折
も後に歷是を用ひて剩分ちて一茅に竜を燒雪の腰に帶させれども故の隨に竜も
減らぬ人の弱い心易かるべ。と鮮れて現八感服して又ひとりもなるひけり登時犬江親兵
衛い村長をひとり向ぎて若們目今はつくん我不死の茅をもて敵と自家の兵の死を
救まく欲ぎれども用ひて驗なるい命數盡て免れざる者狹然べ積惡隱慝の
百人ばかりあるべけれ其甦らざる亡骸い集めくその野の大坑に棄よ就て我疑ひ思へ
よりの那底不知ぎ喚做き坑い敏然に茅萱に掩れれば衍然て稻に者の年々に
あるんに若們何ぞ埋ざるやと問べ村長ぎ答ていはく其我仰でいへども那坑い昔

より埋めまく欲するに底深けれども試に石を投入れば水音幽かに聞ゆ。析あり。然れば底の地勢耶如。捺落かの穢底不知とぞ喚ぶ。微かの氣と言真実立く陳ぬれば親兵備守の沈吟して幷に奇なるを見て我徳に従て騎馬にて那坑に陷りし下を受る者あり。故に其水あるを見て

一

ぞと知れども力を竭し日を累ねて埋めく埋ら坑あらんやと詰るに信乃は諾ひく。我も思ふに因て大に愚案あり。嘗聞五十四田河原の岡山い原是土民ども暴河の渕を浚へ折其壤の遣る方なきに心ともなく築成さるべし遮莫那岡に僅に暴河を隔るのみ国府臺と相對へり敵倘那岡に据るとも城を守る為に害あらず。然れども礼に云ふ所の卿大夫の恥と我異日凱旋の折その美を語ふ。必那岡を山崩さずん非如その略近くもとも民皆耕稼の暇ある毎に日を累ね年を歴るまで一簣一車の功成らば愚公の山を移すに至ん然も

思ひやとうち譚へば信乃現八そのいひけん直元逸友秋李も政木焼雪以下の人毎も件の論議を感佩して其英才をぞ羨みけるとぞ義成主の次の年より葛飾二郷の民に課て五十四田の岡を鋤除せく底不知の坑を填めさせぬに民皆其盛徳を慕ふの故に招ずれども聚合まず其役を楸りて僅に一稔可ふく件の岡を鋤執りて件の坑を填め果しぬ義成主入土民に五稔の調貢を饒して其頭の曠野を送らく鋤せて新田開發の義を教ゆに民皆歓ひて勉さる者なく三稔可ふして新田を開くと數百畝貢に及びぬ永く公私の有益なるに然ば

この課役い葛西二郷の衆民と安房藩中の吏人と心を同ふして勤せて害を除き利を興すの時の人その新田を名づけて二郷藩とぞ喚ぶ。後の人二合半に作るに同所をぞ欲且今も葛西假名町の邊に新田村あり是なり其餘波をぞ欲左まれ右まれ道徳仁義の君臣の迹仰ぐべし。ぞ是後の話を看官前後を照して見るべし。

第百七十回

神藥施し得く敵兵再生を
現八箭を拔て水死の將を救ふ

その日犬江親兵衛は博愛仁恕の心そなはりて敵自家の差別なく刀瘡創及陣歿の兵卒ふ神授の仙丹を施してもく死を起し生ふ回さまく欲まるふ則信乃現八等と商量まを真間井樅二郎秋季を施葉の頭人ふして代四郎紀二六喜勘太等の三名とそ其副とき他等は這神葉を用るふよく其事ふ熟されば然が真間井秋季は隊兵四五百名を従へて代四郎紀二六喜勘太等と共侶ふ這葛西なる村長莊客と母を案内して既ふ立ちんとあける程ふ鄙ふ長尾景春と戰ふく俱ふ疾を負ふく仆まさる須々利壇五郎二四的寄舍五郎いる下の野武士等ふ扶掖れて走れて這里ふ歩ふければ親兵衛は勇りく腰ふ吊る葉を龍より又神葉を含ませて其疾ふ布まるふ疼痛立地ふ祛れ痊愈て心地清まふ做りしを。寄舍五壇五は欲ぶふ堪ぎ

二度の恩惠再生ふ幸ひありと云親兵衛ふ感悅の詞を殷懃く且信乃現八直元逸友秋季ふ初對面の挨ひを演るとも迭の口誼は具ふせまを看官是を查まべ。當下村長莊客們は仁ぶ神葉徒まくふ即效の至妙なるを見て胆を挫しん感佩して其君仁慈ふ御坐せば其臣ふ亦かの如き神葉をもく敵自家の死を救ふ神童あり是豈凡夫の所為をんや俱ふ神人なるべしそれく憑ふく思ひけり徒而施葉の頭人等は五百個の隊の兵と村長莊客們を領て又戰場へ赴くふ施紗の神葉を暴裏ふ親兵衛ふ分ちて代四郎ふ預ける一葉龍ふく事足れりそ今はく別ふ授るふ及ぶ所只親兵衛は代四郎紀二六喜勘太們を叮寧ふ教言めて人の命は千金より重かり叟よ直塚も喜勘太もふまぐふ和ねども今日の施葉は我私の生殺のそ做ふあらむ便是館の御本意を処ふ報ふ德とのくもて其覺を俟我おれは敵ありとても弱ふ困るく一人も多く救ふを善とも限るくのせよいそだね。と諭示せば代四

郎紀二六喜勘太们秋季も亦共侶ふあろ乃果てを罷りけ。姑且あて五十二天
素ゑ吉ハ鄭ふ政木孝嗣ゑ。樋口維龍を刺斃しる鎗の精妙事ハ光景箇様
箇様とのひ出て三天士ふ説示を孝嗣ニ忠ふ推林ふめて已ねく屋ょ哥々ゑ。
てのゑ何らあんとのひく親兵衛よろ向ひく。在下今日の闘戦ょ長尾ゑ隊長雑兵
さハ幾人欧敵あ〜かゑも素ょら名利の為ふせゑハ其首を捕らぎゑハ恁て後ふ美
ア里見殿の御軍令ふ敵の首を捕る者ハ是軍功の二の町ぞ。必重賞をべらぎと
掟きあ〜と人の生るふあろゑ乃ぐて虚言ゑらん。と思ひふ和君所藏の神茱を
のて敵の死をゑも殺んとある。至仁の計謀ふ照して見れハ実ふ仁君の御盛徳感ぎ
ろふ餘りあり。敬服至極仕りぬと謝まれハ親兵衛信乃現八も孝嗣ハ今番のこと
ぎ。豆襄ふ素藤を對治の折も敵の首を捕ぎと雖ども心操をぞ称ふ。當下
直元逸友ハ信乃現八ふ向ひてのゑ。両君ハふ忠ひのゑらん。約莫這回の一大奇

事ハ那野豬ふひるぎゑ初寄隊の戰車を焼て三面敗績ゑ。時那野豬ハ敵ふ
刺ぎ火ゑも焼れぎ掻消をぞく見ぎを做らしハ最怪むべ乃ゑるふ寄隊の三将返
去て三面各死を爭ふ戰ひ闌ゑ。一時件の野豬六十五頭ハ又忽焉と出て来て
よせて寄隊の騎馬を駈仆ける。帮助ふよりて徒速ふ埒ハ開ぎ。倘那野豬微らせゑ他
人ハ知ぎ卑職ゑ。成氏主の一陣を敗り難ゑ勢乃と告れぎ現八點頭て并ハ
亦唱ゑも同意ハ那野豬の帮助ふよりて然だゑ骨を折らぎて寄隊の副将を
生擒ゆ。寔ふ可賀々々と祝ぎ信乃も笑局ふ入て却親兵衛ふ恁ると亟巫豬の
事の顛末を告れハ親兵衛感嘆て咱ゑも亦京師ふ在り〜時故画の虎ふ霊
験て抜出く山ふ入り〜と管領政元主の為ふ對治ぎける奇談あり其首尾ハ箇
様々々と徳用堅削の毒悪政元主僕の奸詐並ふ五虎の確執横死及秋條廣
當ゑ賢才の計謀まで當時の崖略を詳ふ説示せ。信乃現八ゑふもちろん大家

みゝを敬く親兵衛が弓馬の本事い天助神祐あるゝ似くゝと其画の虎の奇譚ゝ
耳を敬く親兵衛が弓馬の本事い天助神祐あるゝ似くゝと其画の虎の奇譚ゝ
軍旅の疲労を慰めく感嘆せざるゝ者なけゝ。有徳一程ゝ李冬の賀の稍伸さ
るも短く覚て大陽斜ゝ傾りけゝを現八瞻仰て信乃ゝ云ふ。寄隊ゝ送ゝく敗
績ゝ其の地ゝ在ゝ者ゝ一とゝへゝ我们恁而居らゝ要ゝ。和殿ゝ杉倉と共伴ゝ
犬江並ゝ政木以下。新参の人々を相伴ゝく岡山へ還りゝ御曹司の大江ゝ
さゝゝ待不樂のゝ咱ゝ咱ゝ。假名町頭ゝ赴て寄隊ゝ既ゝ大河をゝ渡
て遠く逃去りゝるゝ不已ゝ雀鼠の果ゝ後ゝ参るべけれゝ。立るを信乃
諾ゝ。其説寔ゝ尤ゝ。御曹司の御危戰を我们其折知らざりけれゝ。
いまゝ帰陣の欲ゝを禀ゝ。且全勝の後易を注進ゝ。
ゝ。躯て親兵衛と直元孝嗣们ゝ。ゝ逆友と隊兵過半を留
ゝ。現八の邦助ゝ配分ゝ定ゝ。信乃ゝ則親兵衛と孝嗣次園太郎三

五十三太素ゝ吉。寄舎五郎檀五郎。並ゝ下の野武士笠高師们を従ゝく杉倉
直元と共伴ゝ隊の士卒と犬江の戰兵と伴當を相従ゝく岡山を投ゝ。
程ゝ現八ゝ逆友と共伴ゝ隊兵一千七八百名を領て假名町へとゝ。
真間井樅二郎秋李姥雪與保直塚紀二六漕地喜勘太ゝ秋李の隊兵ゝ
と共伴ゝ其地ゝ々の荘客们ゝ夫役を課ゝく。自他陣殺の士卒を検ゝ自家ゝ雑
兵のみゝて有名の兵ゝ力者児のみ足ゝ又寄隊ゝ山内頭定の遊軍荒内外
助惟定建柴浦小弘望王足利成氏の近習科草七郎望見一郎ゝ深痍數ゝ
所ゝ。又長尾景春の先鋒の頭人樋口小二郎維龍梶原後平景澄荻
野五郎泰儀ゝ処々ゝ分散て仕れて在ゝ。ゝ中ゝ梶原景澄ゝ大塚信乃と
鎗を交へ時小髭兵の外を刺れゝ。ゝ幸ゝく痍深ゝ。脳を破ゝ至ゝ
ゝ。又荻野泰儀ゝ項を刺れゝ。其食道を外れく。左の方を傷られゝ。

ゆく。恁る必死の毎も共ふ亦再生の業の驗あり。代四郎ハ腰ふ帶くる神業を一個々々ふ其古ふ塗らして且瘡口ふ業を布くゑ。輕ハ即時ふ甦生るもあり。重ハ一時或ハ二時一日時の程ふ呼吸歩く。皆我ふ復ら安ら。登時秋季與保ら再生の敵兵を勦り慰めく。里見殿の軍令ハ箇樣々々と仁義の要領を説示ふ。開戰ハ已ことゑぎる所ふ也。其本意ふあらぶ。をとりく自家の士卒ふ今ハ專ら當の敵を數を果きとも首を捕るを功とせられぎ既ふ勝負定りて。開戰果ても首実檢を終れぎ。仁慈ハ大のうーのことるぎ。非如敵の士卒ハとも戰ひ難義ふ及ぶ時君の為ふ戰死者ハ則是忠臣ハ誰ら憐むべらざらん。其陣歿の毎ハ犬江親兵衛が神授の仙丹をりく。生て返ー遣むべーとある。御曹司の御諚ふよりく。我們施業の頭人ら。汝達降んと願ふ者ハ則留を召使ふべー。又其本貫ハ還らまく欲ふ者ハ隨意返ー遣さべー。大の義ふよりて主張せよと。言叮寧ふ諭ー示せば。大家夢の覺る如く。其大仁と神業の經驗即妙ふを歎びく。感涙坐ふ找むまぞふ敬服せざふいるりけり。然ハ是とも有名の勇士ら大の再生の因恩ふよりて。降参せんハさまぞふく。放ち遣られんことを願ふ者ハ亦勘らまぞ。秋季與保大の義を以信乃現八親兵衛ふ報て。且義通の下知ふも放免せらる。寄隊の頭人ハ絶内外助。建柴浦久樋口小二郎梶原後平二。荻野五九郎。科草七郎望見一郎是ハ大の餘猶あべ。然ハ大の頭人ら。異日君遺ふかへり來ー里見の仁心。箇樣々々と神業施ふの由ども。詳ふ告ーく。顯定景春駭嘆ドて。懲りて後悔せざふとゑー。あをりく。里見數世の後まぞも。山内扇谷の両管領ハ敢境を侵さぜるりーハ。只この一拳ふよりて。人間話休題。大の日又神業の奇效ふよりて再生る。寄隊の雜兵の汎々ら降らんと願ふもヨメクり。旦爲ら皆國府臺の

城へ駈入れて軍役ふ充られけり。或い又敵の士卒の神茱の效あ〻て。甦らざる者の亡骸い是命數限りある者歟。然らざ〻其性不仁ゆゑ。積惡の者ゆゑ。那在村と素幻ゞ死首と土民ふ捕られて。再生の便着あ〻ぞるべ。

ぞ〻いられ天四訓の甚ト幻者ゆゑ。亡骸のミハ人並ふ聚合て底不知野ゆゑ。坑ふ藏めく葬るふ及ばぎ。恁而この次の年ふ岡山の壤とのく。件の坑を填め果し時國府臺の守城の頭人真間井樅二郎秋季継橋綿四郎高潔ゞ相謀て那坑迹ゆる塚の上ふ石像の地藏菩薩一軀を造立〻ば。土俗是を底不知の千人塚とぞ喚做しける。あも亦後の話ゝ。却説犬飼現八信道い隊の兵ヨヲく從へて。權旦假名町ふ陣を移して。寄隊の二將顕定成氏景春の敗北の往へ方を探ら極るふ皆大河をうち渡して。往方も知ぎるり〻と云民の想紛れもるゆを。現八ゞて。あらゝんあ〻ふ居らんも亦要ゆ〻。疾岡山へ參らんとて。次の日の曉

天ふ田稅力助逆友と共侶ふ假名町を退陣ゆゑ。連ふ士卒とぞ。岡山ふ近くゆる隨ふ先雜兵を走せく。陣營ふ告禀ゆ〻ふ義通君い昨日自家の全勝の少えあり〻時東六郎ゞ計ひ禀〻て。國府臺へ歸城ゆゑ。あの故ふ當所の陣營あい老煉の士卒一千有餘をりく守らせゆふとゆ〻ゝ。現八力助ゆゑハ岡山へ至るふ及ばぎ。這方の岸ふヨヲく維ゞ措れる戰艦ふ先逆友と士卒を載て。前岸へ渡〻果さぞ。却現八る。胡意隊の兵二三十名を引て。徐ふ艦ふうち乘りて。漕せく前面へ渡〻けり。あ〻る士卒搗合く。混乱さぞと思へ〻る。浩処ふ擐甲ゝる一個の武者の浮屍骸海のゝよる流れ來て。今横走る艦ふ堰れ係りて流れもあへぎ。ありけるを。現八ゆ心とゆる。見〻疑ひ訝りて。眼を定めて猶よく見れば寄隊の大將品ゆる者ふ〻あ〻む。頭鎧の火形ハ白銀ゆるべ。眉額ハ黄金ゆる狹水ふ透徹りく。隱々と見く光景ハ。宛小年魚の走る如く。澤瀉の花の淪

むふ似られば現八いよ〻く訝りて肚裏ふ思ふやう。昨日も亦隔昨も岡山下の鬪戰ふ寄隊ハ一個の仂武者七人も諏訪く這頭の河ふ陷て溺死ぎくもあらぐ今引揚てよく檢せぎハ我疑ひを解くよりなけん。と尋思をあつ聲を立て。扨よ兵毎今ものの艦ふ流れ係りてある。那屍骸を掖揚よと叫べば篙師們阿と応て一人又蛭く鈎索をもつて。件の屍骸を拽止れば。自餘の篙師力を勠して連りふ艦を漕ぐ程ふ艦ハ躰て前面の岸ふ寄りけり。然ども現八ハ尚岸ふ登らで。今係留る浮死骸を艦ふ掖登さて是を見るふ果して寄隊の大將やあらんぎるむ。這人年齡ハ二十許ぎて面の色白く眉厚くあて。相貌野らぎ。身ふ上結絁の薄錦の鎧の上ふ梧桐ふ鳳凰の浮紋ある。故金襴の戰袍を披下あて。皐皮の尻鞘拽る。黄金袴。裝束の大刀を佩てり。開ぐ乳の上三寸許鵬托の外を射られ。征箭一枝晃深く立てぞ儘とれあり。且頭鎧の眉額を又よく見るふ。純金ぎ

彫做りて。筠ふ群萑の花弭ありければ。原来是ふの後生ハ豫聞ふ徳口ハ寄隊の一將。扇谷定正主の嫡子なる。上杉五郎九朝良主狩然らぎハ定正の處長子ぎて。洲崎ハ寄ぎる水軍の副將と。ぎて上杉式部少輔朝寧主なるべ。要てそれと尋思とあて。其箭をやとて扱含りて見るふ。箭幹ふ漆せて四箇の細字あて。犬山忠與と讀れ。現八憶ぎ愕然る。肚裏ふ又思ふ。原来昨日水路の寄隊と水戰の勝負ありし時。あの朝寧を道節ぶ射て水中ハ落せ。るらん然ばそれ這屍骸安房狩相模の浦よりて流れく一宵経てあの暴河ハ漂ひ入りく。今我艦ふ拽りよりの稍見を知る事不用意ふそ不用意るらぶ前より約束あるぶ如ハ噫奇るるる妙るかもあの人一身甲冑ぎるふ水底ふ沈ぎて浮流れも亦奇ハ意ふ這鎧ハ薄鋏ぎ。水ふ入ぎも沈ぎとふ那南倭刀の類る狩然ぎハ琴高ぶ浮剣の類狩。そる左まる

笠間斫河ハ
現八敵將を
盤も
けん八
かこ

かこ
さふ衣
さふ衣
水死の武者

右もあれ是ふよりく猜まるふ昨日洲崎の澳ゑ必寄隊定正主の大軍と水戰あり。大阪が謀る所の八百八人行れて敵を血ふせーるゑむ。あれども昨日這里ゑ寄隊の士卒の陣殺あるまゝ犬江親兵衛が仁徠をりく。ヨヲく生ーて返せーふゑの人い是寄隊の總大將ゑる定正主の愛子ゑんふ。知りゑ其死を救ゐぎい我君大仁博愛の御盛德ふ欠ゑる所あるふ似て後ふ悔ーく思ふこともあるん欲是も亦知るべゑ。然ゐどゑ。ゑの人矢傷を身ふ負ふて水中ふ落ーより大洋數十里を漂流まゑく既ふ一夜を歷ゑゑんふ非如犬江が神葉ゑりとも救ひゐゑ。ゑるべけれ。と思へども先親兵衛ふ告く商量まるゑい不如。と肚ふ向ひ腹ふ答く主意既ふ決りーゑ。躰て一個の雜兵を墓の城へ走らせて親兵衛ふ美を告く那神葉を乞せーゑ。親兵衛が時を移さゞ。伴當才ふ二三名を引く。其使と俱ふ來よけれゞ現八則親兵衛を

艦ふ請乘せ席を讓りて告ると上ふ寫ゑー如く且其意表を解示ーて件の屍骸を見せーゑ。親兵衛隨即檢ー畢く現八ふ向ひてゑゑう大飼和殿の推量如ゑゑる寄隊水軍の副將と吟ゑ。朝寧ゑると違ふべゑ。ゑの人命數いまゞ盡ゑむ且平生隱慝ゑく死ーて二十四時を過ぎゑ活まふ生ざるとあらんや。然ゐ今ゑの死を救ゑ。拘置ゑゐ那大敵をゑく懲まふ足ゑゐ。ゑの義を異日犬山が偽へ吟知るとあらゞさゞゑ腹を立べけれども。ゑゑ道節が仇の子ゑ正敵ふあらざれゞ飽まゞ盡まふ要ゑる所ゑゑ実ふ和殿の意見の如く是ゑの人を活ゑ置ぎい館の仁慈天地ふゑゑーゑ御盛德ふ違ふべ。兵毎又蝕く這死人の戎衣を脫せよとふふ雜兵ゑゑる引て找ゑ寄る者両三名左右ーて水死の武者の戎衣を解ゑ果ーゑ親兵衛則腰を撈ゑゑ。ゑ不死の神葉を含ゑ出ゑ。先死人の口中へ両三番推入れて又ゑの矢傷へ推入れつゑゞ上ふ又葉を布ゑるどーく。又其胸

臍へ塗ら〻畢く却筋力ある雑兵ふ吩咐て死人を倒れ抱せ〻ると徐ふ推立せ〻其腹内ふ在る所の潮水を吐まるふ壁ゞ壜器と輾ーるゞて其口より出る水幾斛ゑると知ゞ既わく吐盡せー時やとら推居さゑて是を見るふ初ハ土の如くゑりけ面部總身稍血色を出ー来て中脘温熱あるふ似れゞ親兵衛ら欝びて徒て這人必生くべ〻徐ふ城内へ舁入させて臥さまるふあくとるゝ。といふふ現八ゑるゑて又雑兵を城へ走らせて轎子一挺舁せゑさせて則其轎子ふ件の武者とうち乗せて舁せ〻く墓の城へ遣ふ現八親兵衛ハ左右ふ立く程ふ犬飼ゞ隊の兵毎も艦より出て轎子とうち守りて斉整ら徒而犬飼現八犬江親兵衛ハ俱ふ函府墓の城ふかへり来ゑ則犬塚信乃ふ件のよりと告知せ〻且東辰相ふ就て義通君ふ吟えと上て却水死の少武者とそゞ儘岡室ふ臥あく。士卒ふ是を守らまるふ約二時許わく那人遂ふ甦生りてゑと動ー又脚を動ーゑどまる程ふ稍我ふ復りけゑを頭を抬げて己と守る士卒と見てうち驚くのゑ所以と知ゞ其身のあふ在るよりと悟難く士卒ふ問へば士卒則其義を告るふ心ゆく驚れゆる。身い愁ふ蘇生まく果敢る敵の城内ふ俘囚ふ做りー悔ーさよと思ふめるら可為もるー徒而現八親兵衛信乃等ゞ義通君の上旨を請まり且辰相ふ告て直元と共侶ふ這蘇生の少武者を城の問注廳ふ召出ー て其姓名来歴を鞫問まるふ詞を卑くー礼を正くまく叮寧ふ問慰あらゞ少武者ハ里見君臣の仁ふ愧義ふ服ー て懐陳ふとと沿ゞ言皆其実情と招るまけり是ふよりて這人ハ管領定正の庶長子る式部少輔朝寧るるとも正可ふ知られ又昨日洲崎の澳の閨戰ふ寄隊敗績奉る事の光景も那里の告と待ゞー て這里ふ風く吟えけり支得と失ふ天ふ在り又人ふ在り求るとふハ則得棄ると云ハ則失ふ〻〻其得失の人ふ在る者ハ又不用意わて得ぬ

るあり。小心あて反く是を失ふことあり。這得失い天ふ在り。人のよく做を所ふあらぶ。
譬ば老氏の所云泰山ふ貨あり。貨ふ心ろ者これを得ることなふ如し。看官ふ意
せよ。蓋這陸路二人所の鬪戰ふ満呂復五郎重時い寄隊の大将朝良と深川の
磯ふ赶蒐逼りて既ふ擒ふ虜べらんとして反て犬阪毛野ふ獲られ。這ふ失い人ふ在り
又洲崎の澳の水戰ふ大山道節忠與ちと上杉朝寧と射て落しこれども矢場ふ
其首を捕るふ由なく反て現八ふ其敵を獲られて。剰親兵衛が神某を朝寧い
再生ち。這得失い天ふ在り人のよく作る所ふあらぶ是故ふ曰得と失い天ふ在り。又人ふ
在りよく思いぶべらんぶ世の人あの理ふ暗けれぶ惑ふて且天を怨と人を咎めざるい
なー斗を醒さまく欲まるい作者の老婆深切を是本傳の本傳なる所以ん越ふ先
其緒を解く道い即朝寧と射るふい後回水戰の段ふ具ん看宣前後を照してよろべし。

南總里見八犬傳第九輯巻之四十二上 終